認定NPO法人・「抱樸（ほうぼく）」研修・ボランティア活動報告

文学部人間関係学科
2年　菊岡 琢真

はじめに

文学部人間関係学科では、春休みを利用し、2月3日（金）、4日（土）、1泊2日のプログラムで福祉のボランティア・研修を行いました。今回は全国でも有名な、困窮者支援を長年続けている認定NPO法人・「抱樸（ほうぼく）」を訪問し、事業等の研修、ホームレス支援のボランティアに参加し、現場を体感することができました。

人間関係学科では、福祉を学ぶ多くの学生が在籍しています。しかし、講義で、多くの実例を取り上げても、現場を知らない学生にとっては理解することが難しい場合があります。そこで、人間関係学科の学生に呼びかけ、私を含め4名の学生が研修・ボランティア活動に出かけることになりました。実際に現場の空気感や緊張感を共有し、一定の責任を負うことで、今まで以上に有意義な学習ができたと思います。

1 「抱樸」の理念と活動

「抱樸」の活動

認定NPO法人・抱樸（以下、「抱樸」）は、私が別府大学に入学する以前、3年間働いていた職場です。研修の初めに、「抱樸」の理念、様々な事業について、無料・低額宿泊施設の抱樸館・北九州館長の高橋一誠氏より説明を受けました。

「抱樸」は、以前、「北九州ホームレス支援機構」という名称で活動しており、その活動の発端はホームレス生活を余儀なくされている人々の実態調査でした。路上で生活している人々に話を聞く際、おにぎりを持ち寄り定期的に訪問する一方で、本格的に支援をしようと有志で集まったボランティアと共に、公園にテントを持ち込み大きな規模で炊き出しを行うようになりました。

次に、炊き出しだけでなく、路上からの脱出を目指し、アパートを借り上げ入居してもらい、社会への復帰を目指す活動を行うようになりました。現場で出会った当事者の人々から「抱樸」は学び、必要な支援をそれぞれの事業に発展させていきました。

「抱樸」の活動理念は、以下の3つです。

一、ひとりの路上死も出さない
二、ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を
三、ホームレスを生まない社会を創造する

“ひとりの路上死も出さない”

当時200名を超える路上生活者が炊き出しに毎週参加するような時期があったといいます。少ないボランティアで数百の弁当を準備し配るために、机で区切り、並んでいただくなどと工夫を凝らしました。しかし、炊き出しに来ている一人のホームレスの男性から「なぜ机で区切るのか。あんたもわしもおんなじいのちだろ」と問いかけられました。

弁当等を機能的に配るように考えたのですが、大切なものを見失っていないだろうかと重大な問いかけでした。路上で亡くなる多くの人は氏名不詳と記され、家族もわからず、文字通り孤独に死と直面しています。「抱樸」は“ホームレス”を支援しているのではなく、“その人”を支援しているのです。私たちにも名前があるように、ホームレスとされる人々にも名前があります。この言葉を投げかけられてから、“おんなじいのち”は

「抱樸」の重要な合言葉となりました。現在でも公園の炊き出しをするテントにその文字が書かれています。

“ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を”

事業説明の中で、以前テレビで放送された「抱樸」のドキュメンタリー番組を見ました。教科書でも有名な下関駅放火事件を起こした本人のその後を追った記録で、「抱樸」の理事長である奥田知二氏が、出所後の身元引き受人として迎え入れ、自宅で生活を共にしながら課題に立ち向かっていくという番組でした。下関駅に放火した津田さん（仮名）は、その日行くあてもなく、刑務所に戻りたいという理由で駅に放火し、懲役10年の判決を受けました。

また研修では、別の男性についても説明を受けました。無事路上から脱出し、アパートへの引越しを済ませました。しかし、別れ際に見た４畳半に一人ポツンと座っている彼の姿が、路上にいた頃と被って見えたというのです。

路上から脱出するのに家さえあればよいのか、また路上でなければよいのか、「抱樸」は問われていました。「抱樸」では“困窮状態”を「ハウスレス」と「ホームレス」と分けて考えています。「ハウスレス」は物質的な困窮を意味し、“何が”必要かを問うています。「ホームレス」は関係性の困窮を意味し、“誰が”必要かを問うていると考えています。

津田さんは下関駅に放火する一週間前に出所したばかりで、行くあてもなく警察に保護されたり、生活保護課に連れて行かれたりしていましたが、ついに誰（公的機関）からも支援を受けられずに放火に至ります。この時、津田さんは二重の困窮状態にあったのです。番組では奥田理事長の自宅が居場所となり、家族が支援者となり、津田さんと生きていく様子が映されていました。ちなみに、私たちは研修中に偶然、津田さんとお会いすることができました。施設内で一緒に暮らす方々と楽しげに過ごしており、何の問題もなく生活している様子でした。

“ホームレスを生まない社会を創造する”

「抱樸」の活動の原点になる組織が発足したのは1988年であり、2000年にNPO法人化し「北九州ホームレス支援機構」が誕生しました（以下、支援機構）。この時、支援機構は一日も早い解散を宣言し、活動をスタートさせたといいます。生活困窮者を支援する活動がいらなくなる社会を願ってのことです。

しかし、今日まで活動は続き、課題も深刻化しています。ホームレスの４割が知的障害者、あるいは、その疑いのある人という事実や、路上生活には至らないが、制度に繋がりにくい貧困世帯、子どもの貧困など様々な問題があります。ここに先ほど述べた「ホームレス」「ハウスレス」の考えを当てはめることができます。

このような中でもホームレスを生まない社会を創造する、ということが可能なのでしょうか。しかし、支援機構はそれでもその理念を掲げ活動を続けてきました。そして、2014年に「抱樸」へと名称を変えて再スタートをきりました。この「抱樸」の意味を奥田理事長は次のように述べています。

『抱は、抱く。樸は、原木の意味です。抱樸には、大きく二つのテーマがあります。第一のテーマは、受容と希望です。山から切り出された原木をそのまま抱く。製材所に運ばれて整えられたら受け止めるのではなく、原木をそのまま受け止めるということです。その時、希望が生まれます。原木は、役割を得て、杖や家具となり、他者のために生き始めます。第二のテーマは、絆は、傷を含むということです。原木のままお互いに抱きとめるということは、傷つくことが伴うということです』

先ほどの津田さんは、あの日放火するということ以外に選択肢があったのでしょうか。放火は罪です。しかし、前科があろうが、知的障害だったとしても、社会も誰も受け入れてくれなかったこと自体が問題なのかもしれません。後に、津田さんはもっと早く出会っていれば放火はしなかったと話しています。

無縁社会といわれる現代にホームレスを生まない社会を創造するということ、それは、人と人とがまじめに、傷つきながらでも向き合うことから始まります。私たちは研修の後に、炊き出しのボランティアに参加しました。そこでは、自立を果たした元当事者の方々が、ボランティアとして支援する側で活動に参加している姿を目にしました。出会うことで人は変えられていくことを「抱樸」は証明してきたのだと考えさせられました。また奥田理事長の言葉を抜粋したいと思います。

『死にたいと言っていた人が笑うようになる。絶望していた人が希望を語り始める。助けられた人が、助ける人になる。反対が信頼と支援に変わる。これは、夢想家の言葉では、ありません。私は歴史の証言者として、今日のこのことを申し上げたいと思います。人は、いつか変わる、希望はある。この活動は、人の希望に満ちた活動でありました』

② 炊き出しボランティア・夜間巡回訪問

公園での炊き出しボランティア

私たちは研修を受けた後、炊き出しが行われる公園に向かいました。公園の一角に“おんなじいのち”と書かれた大きなテントが張られ、食事ができるように椅子とテーブルが準備されていました。私たちが炊き出しの現場に来た時にはすでに40名ほどのホームレスの人々が並んでおり、ボランティアの人々およそ20名が、支給する弁当や薬などの準備を終えたところでした。炊き出しに初めて参加する学生３名と引率者として参加した篠藤明徳教授は、弁当班として一人一人に手渡しながら、献立を説明し、労いの言葉をかけました。

拠点炊き出しでは、お弁当のほかに、薬や衣類の配布、医師（ボランティア）による健康相談や弁護士・司法書士（ボランティア）による法律相談が行なわれています。今回は、健康相談も行なわれ、また、散髪ボランティアなどもあり、すべて無料で希望者全員に行っていました。

巡回訪問

拠点炊き出しはおよそ１時間で終了し、このあと各地区に車を走らせて巡回訪問に向かいます。北九州市内の小倉地区、八幡地区、若松地区、門司地区、紫川周辺、そして、山口県下関地区へ「抱樸」の職員とボランティア数名が分かれてチームで巡回します。様々な事情で拠点炊き出しに参加できない人々のために会いに行き、「抱樸」のことを知らない、生活困窮の疑いがある人々に声をかけ、そして、路上からの脱出を目指すために、各サービスの説明と意思を確認します。今回私たちは、小倉地区を巡回しました。小倉駅周辺や銀天街を練り歩き、ホームレスの人々に弁当や薬などを配り、近況を伺います。

バス停で出会った男性は、夜通し歩き回り体温を維持します。そして日中安全な場所で仮眠するのです。ホームレスは昼間からだらだらして、という意見をよく耳にしますが、夜安全に眠ることができないというのが現実です。また、夜間人目のない場所で若者から襲撃を受け、路上生活者が亡くなるというニュースがありますが、熟睡することができないといいます。

その後も小倉のあらゆるところを巡回し、多くの路上生活の人々と出会いました。歩道橋の階段下に網が設置され、公園にあるベンチ中央に手すりが付けられているのも、路上生活者が過ごしにくいように工夫された仕組みの場合があるとの説明を受けました。公園の美化運動などで一番に排除されるのはホームレスなのだと聞き、私たちは考えさせられました。これは社会的排除のひとつだということも気づきました。

私たちが宿泊先に帰ったのは深夜１時を過ぎたころでした。研修と炊き出し・巡回訪問の疲れもありましたが、気持ち良く睡眠できたわけではありません。それは先ほどまで路上で出会っていた“その人”がまだ路上にいるのに対して、自分たちは暖かい布団で安心して眠ることができる、という現実に戸惑いを感じたからです。

③ 参加した学生の声

“おんなじいのち”その言葉の重みが活動をしていく上で身に染みて分かりました。困窮者を支援していく過程を、１泊２日と短時間ではありましたが、その背景を目で見て学ぶことが出来た気がします。

教科書ではよく「当事者を受け入れることから」と記載されていますが、人を受け入れる行為は自分の想像を超えるものでした。当事者の現状把握をするにもまず会話をスムーズに進めなければいけない。その会話さえ拒む人もいれば、うまく意思疎通が図れない人だっている。スタートさえ詰んでしまう事実。差別するわけではありませんが、発達障害・精神障害・知的障害をもつ人たちは、更に難易度が高くなります。支援のスタートがこんなにも難しいとは正直考えてもいませんでした。信頼関係を築くまでかなりの時間と労力、想いや皆さんの力がどれだけあったのか、計り知れません。関係を築いた後で当事者の個人情報を明確にし、生い立ちや、性格の特徴を探る…。お話を聞いて圧倒されました。

自立する、これがどれだけの簡単なものではないのか、そして重要であるか。自立していった方達の個人の成長力と、支援者の力がどれだけ素晴らしいことなのかを今回痛感しました。社会的に孤立している人は、私たちが普段当たり前に感ずることが当たり前ではない、と耳にした時は、本当に衝撃を受けました。その中でも「名前・住所・電話番号」の３点。生活していて、資料や申込書、旅行先でのホテルのチエックイン時等、何気なく書いてある項目です。それが無い？書けない？名前なんて物心ついた頃から周囲に呼ばれ続けているため、自然と認識して生きてきました。しかし、その“周囲”がいない。「おはよう、おやすみ」の当たり前の挨拶をしていた“家”が存在しない。なにかしら音が鳴り「はい、もしもし」。その言葉さえ言うことがない生活を想像したことがありませんでした。

今思うと自分は本当に恵まれた環境で、いや、恵まれたという言葉が適当なのかどうかは分かりませんが、そんな環境で育てられたのだと思うと感謝する気持ちばかりです。逆にその環境で育たなかった、また、その環境を失った人たちをどう支援していくのかが難しくもあり、非常に大切な課題だということも今回痛感しました。

施設の方、ボランティア活動に参加している方、当事者と触れ合うことが出来た今回の体験でした。この活動をもっといろんな人に知ってほしいし、理解してほしいです。

人は“おんなじいのち”という人間の原点を見つめ直すきっかけとなりました。（人間関係学科３年　清原有紀子）

おわりに

普段の生活の豊かさや、学生としていられる現状がいかに恵まれているか。そして日頃行っているボランティアでは達成感や目標達成を味わうことができるが、ホームレス支援のボランティアはそうではありませんでした。実際に活動に入り込み、気づいたこと、細かい制度や事業内容を学び、現場の厳しい状況を体験し、苦労を経験しました。

今回の研修とボランティアの中で「抱樸」に関わる職員、そしてボランティアの方々がよく口にしていたことに、「出会った責任」というキーワードがあります。私たちが感じた苦労ももしかするとこの出会った責任感なのかもしれません。一度行って終わるボランティアではなく、今後も継続して出会い続けることでより真理に近づくのかもしれません。